シャーロック・ホームズの紫烟

長沼弘

# シャーロック・ホームズの紫烟

長沼弘毅

文藝春秋

# シャーロック・ホームズの紫烟

著者紹介
1906年東京に生まれる
1929年東京大学法学部卒業 経済学博士
元大蔵次官　元公正取引委員会委員長
前日本コロムビア会長
「日本探偵作家クラブ」「アメリカ探偵作家クラブ」「ベイカー・ストリート・イレギュラース」各会員　外国での作品発表多数
著書　専攻関係（労働・経済・社会問題）と推理小説の研究・翻訳のほか和漢詩文の研究書がある
住所　東京都品川区五反田6～191

昭和41年8月1日　第1刷

著者　長沼弘毅（ながぬま こうき）
発行者　上林吾郎
発行所　株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3

本文　理想社印刷所
色刷　半七写真印刷
製本　中島製本所

定価　450円

万一落丁乱丁の際はお買求の書店または発行所にてお取替致します

© 1966 Kohki Naganuma　Printed in Japan

# はじめに

この本は、

「シャーロック・ホームズの知恵」　昭和三十六年七月

「シャーロック・ホームズの世界」　昭和三十七年二月

に、つづく、ホームズ研究シリーズ第三巻とお受け取り願っておきましょうか。「知恵」では、食前のアペリティフを召しあがっていただき、「世界」で、いよいよ食事にかかりましたが、それも、スープから魚料理の献立まで行き着いたところで小休止ということにしてしまいました。そのとき、私は、このつぎは、「もう少し手の込んだ脂っこい料理を召しあがっていただくことにいたしましょう」と申しておきましたが、その準備中、アメリカの「ベイカー・ストリート・イレギュラース」本部で講演した帰りに大病を患い、大分みなさまをお待たせいたしました。ですが、このたび、ようやく、かねてお約束の「脂っこい料理」すなわち肉の料

理の一部を、召しあがっていただく段取りになりました。ただし、この肉料理は、一皿ではとても十分とは申せず、あと二、三のお皿に手をつけていただかねばなりますまい。

本書では、「ホームズの隠退」を取り扱いましたが、われわれの心のなかには、こんにちといえども、ホームズは依然として生存して活躍をつづけているのですから、この本で、いよいよ筆を擱くということにはなりません。まだまだ、続篇が用意されているとご承知ください。「世界」を世に問うてからあと、かなりの物量の新資料が、たちまち、私の書架群書のなかで幅をきかすようになりましたが、これらを、いちいち克明に征服して、みなさまのお眼にかけるということになると、いつまで立っても区切りがつきません。そこで、この本はこの本として、こんにちの時点で、一応とりまとめ、後日またまた、資料を料理して、追撃戦を展開するより仕方がありません。そのときまで、なにぶんのご猶予を賜りたいものです。

この本のなかに、「シャーロッキアン」ということばが、ときどき出て参りますが、この「シャーロッキアン」(Sherlockian) というのは、申すまでもなく、シャーロック・ホームズのファン、崇拝者、研究家などの総称であります。しかし、この本をご一読くだされば、ご理解願えることとおもいますが、ここまで来ると、ホームズを踏み台

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

にして、ひろく社会雑学（sociology miscellanea ――こんな学問があっても、よろしいでしょう）の領域に一歩足を踏み入れてしまいます。

また各作品については、できるだけ、その事件の起こった年月を明らかにしておきましたが、この年月については研究家の間でも、いろいろ議論のあるところです。これをいちいち、ご紹介していては限りがありませんので、一応ベル（H. W. Bell）の Baker Street Studies に掲げられているもので統一してあります。

人呼んで、私の病は、もはや、膏肓（こうこう）に入ったとしています。私は、それで、一向に構いません。むしろ本懐です。

Another glass, Watson !

一九六六年六月

著　者

Photographs and paintings appearing in this volume are reproduced with the kind permission of Estates of Sir Arthur Conan Doyle.

# 目次

第一章　ホームズと大学　9
「秋も大分深まって……」
—ホームズ

第二章　ホームズとコカイン　53
「君も一本やってみないか？」
—ホームズ

第三章　ホームズと煙草　77
「君、強い煙草の匂いは、別に気にならないでしょうね」—ホームズ

第四章　タイヤの問題　173
「タイヤの跡のことなら、ぼくは四十二種類も……」—ホームズ

第五章　ホームズの隠退　189
「養蜂実用便覧——これが暇にあかせて書いた晩年の本だよ」—ホームズ

装幀　伊丹一三

# シャーロック・ホームズの紫烟

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# 第一章　ホームズと大学

「秋も大分深まって……」

ホームズ――（「グロリア・スコット号」）

ホームズは、どこかの大学に在学していたことがある（卒業したかどうかは一つの問題であるが）。その大学は、古い大きな大学で、まずケムブリッジかオックスフォードであったであろうというのが通説[1]になっている。このうちのどちらかということになると諸説紛紛であるが、一応議論の手がかりになるのは、「スリー・クォーターの失踪」（一八九七・二事件）と「三人の学生」（一八九五・四事件）である。だが、この二つの事件を突き詰めていっても、ケムブリッジ、オックスフォードのどちらであったか、一向に極め手が出て来ない。ところで、「這う男」（一九〇七・九事件）では、ドイルは、ホームズ曽遊の地として、ケムフォード大学（Camford）をあげている。これは、ケムブリッジ（Cambridge）の Cam とオックスフォード（Oxford）の ford とをつなぎ合わせた洒落のようなもので、世の研究者はここに至って、あっさりと、肩すかしを食ってしまった形になる。

ぼくは別著「シャーロック・ホームズの知恵」のなか（第十一章）で、右のような事情をかなりくわしく論じておいたが、その末尾で、つぎのようにのべておいた。

――ホームズの大学について、特に肌理（きめ）のこまかい議論が展開されるのは、……「グロリア・スコット号」と……「マスグレーヴ家の儀式」とである。シャーロッキアンの本領は、この二作において、もっとも派手に発揮されるのだが、あまりにも専門的すぎて、本書のような入門書において取り扱うのには、いささか不適当である。後日の研究課題として、ここでは割愛しておく。

さて、この「後日の研究課題」を、ここで取りあげることになるのだが、これもあまり専門的に流れすぎて読者の興味をそいでしまわないように気をつけながら、話をすすめることにしよう。ところで、「グロリア・スコット号」と「マスグレーヴ家の儀式」に取り組む前に、前出「三人の学生」のなかに、ちょっと気にかかる個所があるので、まず、それから片附けてゆくことにする。

――一八九五年のことだったが、いろいろな事件の関係で、シャーロック・ホームズと私（ワトスン）とは、ある大きな大学町の一つ（one of our great university towns）で数週間をすごしたことがある。

と作品の冒頭にのべられている。さて、この大学がどこであるか、犯人はなんという人間かということを、「読者にわからせるように書くことは、心なきことでもあり、不快なことでもあるので」、そういうことのないように気をつけて話をすすめる、と、ワトスンはことさらに断わっている。こ

れが、かえってシャーロッキアンの好奇心を刺戟し、大学はケムブリッジなのか、オックスフォードなのかについての詮索を誘発する結果になっている。

——その当時（一八九五年四月下旬）、われわれは、図書館の近くの家具附きの下宿に滞在していた。ホームズは、この図書館に通って、「初期イギリスの免許状」（early English charters）に関する骨の折れる研究に従事していたのである。

この免許状の研究なるものが、どんなものなのか、われわれは知る由もないが、この事件の起こった前年すなわち一八九四年十一月の「金縁の鼻眼鏡」（The Golden Pince-Nez）事件においても、ホームズは、羊皮紙をまきおさめながら、「家に引っ込んでいたにしては、たっぷり仕事をしたよ。しかし、やってみた結果からすると、これは、十五世紀の後半以来書き綴られた寺院の記録（Abbey's account）ほど、わくわくするようなものではないようだ」などといっている。こうしてみると、ホームズには古文書漁り（研究）が、一つの趣味であったらしい。ここから、歴史的な文献の研究のためには、オックスフォードのほうが便利かケムブリッジのほうが便利かということが問題になって来る。ところで、こういうことを調査した文献がある。著名なシャーロッキアン、ブレイクニーの「『三人の学生』の場所」（The Location of "The Three Students"）[2]というのが、それである。彼は、この論文のなかで、「この大学は、オックスフォードであって、ケムブリッジではない」と断言している。その根拠とするところは、例の「初期イギリスの免許状」である。

ブレイクニーは、一八九五年（事件の起こった年）には、「初期イギリスの免許状」に関する研究が、

学界では大いに流行していたと指摘している。オックスフォードはこういう歴史研究にかけては、他の大学を引き離した業績をあげており、歴史学担当のスタッブ司教（Bishop Stubb）は、当時すでに同大学に、「オックスフォード歴史学部（スクール）」を創設していたが、これは他の大学の追随を許さないものであった。彼自身も一八七〇年に「イギリス初期よりエドワード一世時代に至るイギリス憲政史における免許状その他の図解」（Select Charters and other Illustrations of English Constitutional History from the Earliest Times to the Reign of Edward I）という名著を著わしていた。また、一八七八年には、W・H・ターナー（W. H. Turner）という学者が、ボッドリアン図書館（Bodleian Library）の資料を中心にして、「免許状および古記録の歴年表」（Calendar of Charters and Rolls）という好著を公けにしたが、これは、アマチュア歴史家（ホームズもその一人?）にとっては、実に貴重な文献であったという。

ところで、一方ケムブリッジのほうはどうであったか？　歴史学の学士試験制度（Tripos）は、一八七五年に至ってようやく実施されることになったが、学者の間で、一応、その名前を知られていたのは、シーリー（Seeley）という歴史学担当教授（一八六九――九五年間に教鞭をとっていた）だけであって、その業績も、オックスフォードとくらべれば、遙かにみ劣りのするものであった。[3] 一八九〇年代になって、ようやくメイトランド（Maitland）の研究が、世間の注目をひく程度になったにすぎない。

要するに、こと歴史学に関しては、ケムブリッジは、明らかにオックスフォードの後塵を拝して

いたし、図書館の整備のごときも両校では比較にならなかったのである。ホームズが、中世紀の寺院の文書を読んでいたことは、前出「金縁の鼻眼鏡」で明らかだが、ホームズの資質は、むしろ自然科学（なかんずく化学）の方面に発揮され、人文科学の方面は、素人の道楽程度の域を出でなかったものとみるべきである。[4] としてみると、ホームズの研究には専門家の研究書や素人の手引き書のような資料が欠くべからざることになる。ところで、こういう資料は、ケムブリッジにはほとんどない。従って、ホームズが通っていた図書館というのは、どうしてもオックスフォードでなければならないということになる。

以上が、ブレイクニーの所論[5]である。「初期イギリスの免許状」というものを中心にして展開された議論であるが、これによって、図書館の所在地、従って「三人の学生」の大学の場所は、推定することができた（これも確定的ではない）としても、ホームズの出身校を確認するということには発展しそうもない。

現に、ホームズは、自分の大学を卒業後もあちこちの大学に出入していたとおもわれる節がある。例えば、「赤い輪」（一八九七・一事件）では、その終末に至って、スコットランド・ヤードのグレグスン警部に向かって、

「教育ですよ、グレグスン君、教育ですよ。ぼくは、いまもって、古い大学（Old University）で知識を求めているんです」

といっている。これも彼の出身校とは限らぬことはいうまでもあるまい。

さて、いよいよ「グロリア・スコット号」（一八七五夏～秋事件）と「マスグレーヴ家の儀式」（一八七八・九事件）であるが、この二作品を中心にして展開されるケムブリッジ、オックスフォード論は、まことに百家争鳴といってもよいくらいまとまりのないもので、こういう議論に読者を巻き込むことは、いたずらに混乱を招くだけの結果に終わってしまいそうである。そこで、いろいろの議論を適当に取捨選択して骨組みのようなところだけを紹介することにしよう。

まず、われわれの議論の出発点になる文章を引用することにする。

「グロリア・スコット号」につぎのような個所がみ出される。

――ワトスン君、君にはまだ、ヴィクター・トリヴァーの話はしていなかったかね？　彼は、ぼくがカレジにいた二年間に得た唯一の友人なんだ（only friend I made during the two years I was at college）。ご承知のように、ぼくは、決して社交的な人間じゃなかったんで、いつも部屋のなかにくすぶって、自分一流のつまらぬ思索に耽っていた。だから、自然同年輩（of my year――これは同学年というのと、ほぼおなじことになるであろう）の連中とは、ほとんど附き合わなかったんだよ。……それにほかの連中とは、研究の方面がまるで違っていたので、連中とはてんで接触する機会がなかったんだ。知っているといえば、トリヴァーただ一人だった。それも実に妙な縁でね、ある朝、ぼくがチャペルにゆくとき（one morning as I went down to chapel）、彼のブルテリア（his bull-terrier）が、ぼくの踝（くるぶし）に嚙みついたからなんだ。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com